

これならわかるぜ！

## ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の句式編

### 【第2回】受身

さて、第2回の講義は受身の形だよ。

受身の形には大きく分けて3つ、細かく分ければ5つあるんだが…

え？なんだって？ 3つで十分だって？ まあそう遠慮すんなよ。

#### 1. 受身の助動詞「被」「見」を用いる形

助動詞って覚えてるかい？

もとは動詞なんだが、本来の働きが薄れちゃって、動詞を目的語にとってその動詞に意味を添える語だったよな？

つまり動詞の前に置かれるわけだ。

その**受身の助動詞の代表格が「被」と「見」、**「くされる」という意味を添えるんだ。

「被」は、「被害」とか「被選挙権」とかいう熟語を思い浮かべれば、受身を表すってが何となくわかるだろ？

「被害」は「害される」ってことだし、「被選挙権」は「選挙される権利」だもんな。

「被」は、もとは「被<sub>レ</sub>禍<sub>ニ</sub>」(災いを受ける)のように、「受ける」とか「こうむる」という意味だったんだよ。

それが受身の意味につながったんだね。

じゃあ「見」が何で受身を表すかっていうと、たとえば「民見<sub>レ</sub>凶飢<sub>ニ</sub>」(人民が飢饉にあう)なんて例からわかるように、「見」には「遇<sub>レ</sub>う」っていう意味があるんだな。

そこから受身の意味が生まれたわけ。

それぞれの動詞の本来の働きが薄らいで、つまり**虚化**して、助動詞として働くようになったんだよ。

### 煬帝被<sub>レ</sub>殺<sub>サ</sub>。

▼煬帝殺<sub>サ</sub>せる。

▽煬帝が殺された。

受身の助動詞「被」が「殺<sub>ス</sub>」「(殺す)」という動詞を目的語にとつて、「被<sub>レ</sub>殺<sub>サ</sub>」で述部を構成してるん

だ。

だから、「殺される」という意味になるんだね。

いいかい？ 助動詞「被」は動詞「殺」の前に置かれてるだろ？

この位置の確認がとてども大事なんだぜ。

**愛<sup>スル</sup>人<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>必<sup>ズ</sup>見<sup>ル</sup>愛<sup>セ</sup>也。**

▼人を愛する者は必ず愛せらるるなり。

▽人を愛する者は必ず愛されるのである。

これも受身の助動詞「見」が動詞「愛」（愛する）を目的語にとつて、「愛される」という受身を表すんだ。

愛を見るんじゃない、愛されるんだよ。

「被」は受身って覚えやすいけど、「見」は君には受身としてはなじみがないはずだから、ちょっと意識して覚えとけ。

ところで、右の2つの例文、「被殺」は「殺<sup>ス</sup>る」と「被」を「<sup>レ</sup>」と読んでるの、「見愛」は「愛<sup>ス</sup>む」と「見」を「<sup>ル</sup>」と読んでるのはなぜだい？

え？「被」と「見」で読み分けるのかつて？

馬鹿言ってるんじゃないよ！「<sup>ル</sup>」も「<sup>ル</sup>」も日本語だけ。

ほら、思い出せよ、古文の時間に習ったろ？

**受身の助動詞「<sup>ル</sup>」は、四段活用、ナ行変格活用、ラ行変格活用の動詞の未然形に接続し、「<sup>ル</sup>」はそれ以外の動詞の未然形に接続するって、それだよ。**

まあ、漢文訓読の場合、ナ変「死ぬ」はサ変「死す」って読むし、ラ変動詞「有り」が受身になることはないから、四段だけを意識してればいい。

日本語の「殺す」は四段活用だから未然形「殺さ<sup>レ</sup>」に「<sup>ル</sup>」が接続、「愛す」はサ変だからその未然形「愛せ<sup>レ</sup>」に「<sup>ル</sup>」が接続するんだ。

だから「被」「見」を後の動詞を日本語でどう訓読するかで読み分けるんだ。

漢文ばかりやってないで、古典文法の勉強しとけよ。

ちなみに、だいたい漢文の参考書ではABCとかアルファベットを使って形を説明するじゃないか。

その場合、動詞は「Bス」とサ変動詞で示すよな？

だから、「被B」の場合も、「Bせらる」と読みないわけにいかないんだよ。

まさか昼間っから「Bる」なんてヤバイじゃないか？

…あれ？君たちどうしたんだ！



そういう意味では「於」や「于」は日本語の助詞の働きによく似てるよな。

ところで、この弥子瑕ってのは男性なんだぜ。

衛君は衛の靈公だが、もちろん男性。

へ？って思うだろ？ 靈公は男色の君主だったんだ。

おそらく弥子瑕は美少年だったんだろう。

当時衛の国の法律では、君主の馬車に無断で乗ったら足斬りの刑に処せられるんだが、弥子瑕は母親が病気になる時、靈公に無断で馬車使っちゃったんだ。

そしたら靈公は「自分が足斬りにあうことも顧みずに母親のもとにかけつけるなんて、なんて親孝行なんだ！」って言ったとか。

また、2人で果樹園に行ったときには、弥子瑕はその桃があまりに美味しいからって、食べ尽くさずに自分の食べかけの桃を靈公に勧めたんだ。

そしたら、「俺を愛してくれてるんだなあ…」って感動しちゃった。

言っとくが、食い余しものを渡すなんて、ほんとは失礼の極みなんだぜ。

ところが、美少年弥子瑕の容貌が衰えてくると、靈公、「あいつは昔、俺に無断で馬車を使ったし、食い余しの桃を俺に食わせた。許せん！」と、弥子瑕を処刑しちゃったんだ。

怖いねえ… この話の出典『韓非子』では、君主に説くものは、自分が愛されているのか、憎まれているのか、ちゃんと見極めてやらないとあかんよということの喩えに使われたお話。

空気読めってことかね。

◎ポイント… 「被(見) + 動詞」の形で受身を表す時、「誰に」されたかは後に「於」前置詞句を置いて示す。

A 被<sup>る</sup> B<sup>に</sup> 於<sup>る</sup> C<sup>に</sup>

前置詞句

▼ A C に B を びる。

▽ A が C に B を びる。

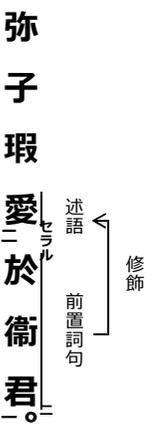
・ 「于」前置詞句が用いられることもある。

### 3. 受身の動作主を表す「於」前置詞を用いる形

「被(見) + 動詞」の形で受身を表す時に、「於」 「于」が誰にされたかを表すって、さっき説明したよな？

つまり、「於(だれ)」「于(だれ)」「は」誰によって「という意味を表すわけだが、述語に受身の助動詞が用いられてなくても、その依拠性を明らかにする性質から受身を表すことがあるんだ。

さっきの弥子瑕の例文「弥子瑕見<sup>ル</sup>愛<sup>セ</sup>於<sup>ニ</sup>衛君<sup>ニ</sup>」(弥子瑕が衛君に愛される)は、同じ話が『説苑<sup>えん</sup>』という書物にも載ってるんだが、ここでは次のようになってる。



- ▼弥子瑕<sup>ひしかいけん</sup>衛君<sup>あひ</sup>に愛<sup>せ</sup>せらる。
- ▽弥子瑕が衛君に愛される。

あれ？助動詞「見」がない！って気がついた？  
もちろん助動詞を用いた方が受身の意味ははっきりするけど、実はこれでも同じ意味を表すことができるんだ。

その鍵は前置詞「於」の働きにあるんだよ。  
「愛衛君」なら、「衛君を愛する」という意味になるというのはわかるだろう？  
他動詞「愛<sup>ス</sup>」が、その他動性の目的語「衛君」をとってるんだからね。  
逆に言うと、「衛君を愛する」という意味なら、「愛<sup>ル</sup>於<sup>ニ</sup>衛君<sup>ニ</sup>」という構造はとらないってことだ。  
述語の後に置かれる「於」前置詞句は、述語の依拠性を明らかにするのがその働きだからね。  
この時、「愛」は、「愛される」という意味の受動態になっているんだ。  
それが何に依拠するかを前置詞句「於衛君」が示してる。  
別の言い方をすれば、「愛」が「愛される」という受動態になっているのを、前置詞句「於衛君」が教えてくれるともいえるね。

君らのように、漢文の意味を知ろうとする者は、「愛<sup>ス</sup>」という述語と、「於衛君」という前置詞句との関係を「衛君を愛する」以外でどう説明するのが一番自然かということに着目してほしい。

「於」前置詞句が述語のどんな意味に対して、その依拠性を明らかにしているかを考えるってことだね。  
たとえば、「於藍」という前置詞句を考えてみよう。  
「藍<sup>あい</sup>」というのは「青」の染料をとる植物の名前だよ。  
「於藍」だけならどういう意味かなって決まらない。  
でも、「出<sup>ユ</sup>於<sup>ニ</sup>藍<sup>ニ</sup>なり」という述語に対して、「於藍」はどこから出るといえるのかという依拠性を示すことになるだろう…

しまひ、出<sup>ユ</sup>於<sup>ニ</sup>藍<sup>ニ</sup>なり」と「於藍」との関係で、一番自然なのは「出<sup>ユ</sup>於<sup>ニ</sup>藍<sup>ニ</sup>」(青の染料は)藍草

から出る)じゃないか。  
そうだろう？

でも、「青於藍」ならどうだい？

この「於藍」は、述語「青」にどんな依拠性を明らかにしてる？

「藍から青い」なんてあり得ないし、「藍に青い」も「藍で青い」もおかしいよね？

この述語「青」は、「より青い」という比較態になってるんだ。

そして、「於藍」が、それが何に依拠するか、つまり何を比較の対象とするかを明らかにする。

つまり、「青於藍」(藍草よりも青い)ということ。

そして、その解釈が一番自然じゃないか。

つまり「於」前置詞句が、述語に対してどんな依拠性を明らかにするかは、述語との関係で決まるんであって、前置詞句だけでは決まらないってことわ。

そういうふうになれば、「愛於衛君」は、受身で「衛君に愛される」と解釈するのが一番自然だろう？

「於」や「于」がいつも受身を表すわけじゃない、何度も言うが述語との関係を考えるんだ。

え？難しいって？

このためぐち先生だって、会うごとに確認して判断してるんだぜ。

最初から決まってるんじゃないんだ。

その意味で、この「於」前置詞句のみを用いて受身を表す形が、一番ごわい。

やっぱりたくさん漢文を読んで、慣れることが必要だな。

◎ポイント……受身の助動詞をいわずに、受身の動作主を「於」前置詞句で示して、受身を表すことがあ  
る。

A B C  
ニ 於  
前置詞句

▼ A C に B を ぬ。

▽ A が C に B を ぬ。

・「于」前置詞句にも同じ働きがある。

#### 4. 受身の動作主を表す「被」前置詞を用いる形

ちよいと厄介なのが、この「被」前置詞句で受身を表す形だ。まずは例文をみてもらおう。

亮子被<sub>レ</sub>蘇峻<sub>ニ</sub>害<sub>セ</sub>。

▼亮の子蘇峻「害せらるる」。

▽(庾)亮の子が蘇峻に殺された。

あれ？と思えた諸君は、ちゃんとわかっている人たちだね、褒めところ。え？なにが「あれ？」だって？

困るなあ… 漢文をちゃんと構造的に理解してるかい？

もし「被」が前に説明した受身の助動詞なら、この語順には絶対ならぬだろう？  
だって助動詞は動詞を目的語にとるんだぜ。

蘇峻は名詞だろ？

助動詞「被」を用いて同じ意味の文を作るなら、「亮子被<sub>レ</sub>害<sub>セ</sub>於蘇峻<sub>ニ</sub>」になるはずだろ？  
だから、「あれ？」なんだよ。

実は、この「被」は、助動詞ではなくて前置詞なんだ。

「被蘇峻」で「蘇峻に」という受身の動作主を表して、述語「害」を連用修飾しているだよ。  
つまり、次のようになる。

亮子被<sub>レ</sub>蘇峻<sub>ニ</sub>害<sub>セ</sub>。  
主語 前置詞句 述語 修飾

本当は「亮子被<sub>レ</sub>蘇峻<sub>ニ</sub>害<sub>セ</sub>」と読む方が、構造的には忠実な読み方になるんだが、昔から「被」は「る」「らる」と訓読している関係で、さっきのような読み方が通用してるんだ。

そういう意味では、構造と訓読が乖離してしまった例ともいえるし、君らもわかりにくくてお気の毒なんだが、次のような例になると、さすがに構造通り読まなきゃどうしようもなくなるんだ。

亮子被<sub>レ</sub>蘇峻<sub>ニ</sub>見<sub>ル</sub>害<sub>セ</sub>。

「見」を「らる」と読まなきゃならない関係で、まさか「被」も「らる」と読むわけにはいかないだろう？  
だから、「被蘇峻」を「蘇峻に」と読んでる。

どんな場合も「被」前置詞句は「る」と読んでくれればわかりやすいんだが、訓読の習慣ばかりはどうにもならなくてね…

この「被」前置詞句の用法は、両晋の頃から始まって、唐代以降は頻繁に用いられるようになったんだ。だから、新しい時代の文章を読むときには要注意だぜ。ちなみに、「見」にはこの前置詞としての用法はないよ。

それにしても、「A 被<sub>ル</sub> B 於<sub>ニ</sub> C」と「A 被<sub>ル</sub> C B」の2つの構造を、ただ闇雲にABCなんか使って丸覚えしていると、どう違うんだかわけわかんなくなるよな？

句形の丸暗記を勧める不勉強な先生の中にも違いがわかってない人がいっぱいそう。

選ばれし君達は、そのもっともっと先を行かなきゃだめだぜ。

◎ポイント！…「被」前置詞句が受身の動作主を表し、述語を運用修飾することで受身を表す。

A 被<sub>ニ</sub> C<sub>ニ</sub> 前置詞句

B<sub>。セ</sub>

▼ A C に B せらる。

▽ A が C に B される。

・構造と訓読にズレがあるので注意が必要。

・助動詞「被」の用法との語順の違いに注意。

## 5. 動詞「為」を用いる受身の形

受身の中で一番安定した形が、この動詞「為<sub>ナル</sub>」(〜になる・〜となる)を用いるものだよ。これは古くは次のような形をとっていたんだ。

身<sub>ハ</sub>為<sub>ニ</sub>宋<sub>ノ</sub>国<sub>ヲ</sub>笑<sub>ト</sub>。

▼身<sub>ハ</sub>は宋<sub>ノ</sub>国<sub>ノ</sub>の笑<sub>ハ</sub>ひと為<sub>ル</sub>。

▽(宋人の)身は宋の国の笑いとなった。↓身は宋の国の人に笑われた。

ご存じ「守株(株を守る)」の最後の部分。

切り株にけつまずいて首の骨を折った兔に、あくせく働かなくても兔が手に入ったからと、農具を放り出して切り株を見守り続けた宋人が、國中の笑いものになったという、あれさ。

この文は、語法的には次のように説明される。

主語 述語 目的語  
身<sup>ハ</sup>為<sup>ル</sup>宋<sup>ニ</sup>国<sup>ヲ</sup>笑<sup>ヒ</sup>。

つまり、「身が宋の国の笑いものになる」という意味だよ。

でも、それってわかりやすく言うと、「身が宋の国の人に笑われる」という受身の意味だろ？

だから、受身の意味で解釈されるようになったんだ。

ここで注意したいのは、「為<sup>ル</sup>」の目的語「宋<sup>ニ</sup>国<sup>ヲ</sup>笑<sup>ヒ</sup>」（宋国の笑い↓宋国の笑いもの）が名詞句だということ。

目的語は名詞か名詞句でなければならぬわけだから、当たり前なんだが、これをより名詞句だつてことを明確にするために構造助詞「所」を用いると、次の形になる。

襄公<sup>ハ</sup>為<sup>ル</sup>弟<sup>ニ</sup>無<sup>知</sup>所<sup>ニ</sup>弒<sup>ス</sup>。

▼襄公<sup>ハ</sup>弟<sup>ニ</sup>無<sup>知</sup>の弒<sup>ス</sup>する所<sup>ニ</sup>と為<sup>ル</sup>。

▽襄公は弟の無知に殺された。

「無知」ってのは襄公の弟の名前だよ。

さあ、よく例文をにらんで、構造がどうなってるのか考えてみようよ。

何が主語で何が述語で、目的語は何だい？

正解は次の通り。

主語 述語 目的語  
襄公<sup>ハ</sup>為<sup>ル</sup>弟<sup>ニ</sup>無<sup>知</sup>所<sup>ニ</sup>弒<sup>ス</sup>。

襄公が「弟無知所弒」になったんだよ。

この目的語がちゃんとわかるかが鍵だな。

構造助詞「所」が名詞句を作るつてのは構造編で学習したよな？

「所」は客体を表す名詞句を作るつてき。

「所<sup>B</sup>」で「ソレをBするソレそのもの」、「所<sup>弒</sup>」なら「ソレを殺すソレそのもの」だから、「殺す（対象である）人そのもの」という意味になる。

さらに、「A所<sup>B</sup>」で、「Aの、ソレをBするソレ」から、「AがBするもの・こと・ひと…」という意味の名詞句になる。

つまり、「弟無知所弒」だと、「弟の無知の、ソレを殺すソレそのもの」から、「弟の無知が殺したひと」という意味。

つまり右の例は、襄公が「弟の無知が殺したひと」になるという意味になるわけだ。

それは要するに、「襄公が弟の無知に殺される」ってことだろ？

この「A為<sub>ル</sub>B所<sub>ト</sub>C」(AがBのCするものになる↓AがBにCされる)の形は、さつき説明した「A為<sub>ル</sub>B C」の進化形なんだ。

「A為<sub>ル</sub>B C」は、春秋時代から戦国時代に変わる頃に使われ始めて、戦国時代末には盛んに用いられるようになったんだが、その後の時代では、よりわかりやすい「A為<sub>ル</sub>B所<sub>ト</sub>C」にとつてかわられたんだね。

だから、時々、軽率にも「A為<sub>ル</sub>B C」は、「A為<sub>ル</sub>B所<sub>ト</sub>C」の「所」が省略された形だなんて説明するお人があるんだが、成立が逆なんだよ。

ところで、「A為<sub>ル</sub>B所<sub>ト</sub>C」の形は、もともとが「AがBのCするものになる」って意味だから、受身で訳すより、もともとの意味で解釈した方が自然なこともあるんだよ。

たとえば次の例。

### 周処為<sub>ル</sub>郷里所<sub>ト</sub>患<sub>ル</sub>。

▼周処郷里の患ふる所と為る。

▽周処は村人の悩みぐさになった。

「周処」つてのも、人の名前。

人並みはずれた腕力体力の持ち主で、男気が強いもんだから、村人の悩む対象になってたんだな。

「患<sub>ル</sub>」は「思い悩む」って意味だから、受身で訳せば「村人に思い悩まれた」となるわけだが、なんとなく不自然な日本語だろ？

そんな場合は「村人の悩みぐさになった」と本来の意味で訳した方がわかりやすい。

もともとそういう意味なんだからさ。

ところで、「A為<sub>ル</sub>B所<sub>ト</sub>C」の形には、別の読み方があるんだ。

たとえば、さつきの襄公の例の場合、

### 襄公為<sub>ル</sub>弟無知所<sub>ト</sub>弑<sub>セ</sub>。

▼襄公弟無知の為に弑せしむる。

いかにも受身です！って読み方で、ある意味わかりやすいよな。

実は本家中国では、「為」は受身の前置詞と説明されていて、その意味ではこの読みの方がよさそう

んだが、この構造に関しては日本の研究の方が理にかなっていて、やっぱり「為」は動詞だと思うから、構造的には前に紹介した読みの方が適切かなと思うんだ。

どちらにしても、2通りの読み方があるってことを知ってほしい。

最近はまだこの読み方されないけどな。

◎ポイント…動詞「為」を用いて、「〜がーの…する対象になる」の意味から「〜がーに…される」という受身を表す。

A 為<sub>ル</sub> B<sub>ノ</sub> C<sub>ト</sub>

▼ A B の C と為<sub>る</sub>。

▽ A が B に C される。

A 為<sub>ル</sub> B<sub>ノ</sub> 所<sub>ト</sub> C<sub>スル</sub>

▼ A B の C する所<sub>と為る</sub>。

▽ A が B に C される。

・「A 為<sub>ル</sub> B<sub>ノ</sub> 所<sub>ト</sub> C<sub>スル</sub>」と読まれることもある。

## 6. 主語が受事主語であるため受身になる形

受事主語って覚えてるかい？

「基本構造編」の講座で、一番最初に教えたろ？

「太郎が愛される」の「太郎」みたいに、行為を受ける主語のことだよ。

「くされる」ってのは当然、誰かの行為を受けるじゃないか。

だから、**受身文の主語は、必ず受事主語になる。**

受身って、これまで教えたことを振り返ると、通常は受身の助動詞が使われてるとか、前置詞句と述語の関係から受身とわかるとか、あるいは「為<sub>ル</sub>所<sub>ト</sub>」の構造をとるとか、それなりに受身の文だとわかる手がかりがあったじゃないか。

ところが、見かけ上どこにもその手がかりがないのに、受身を表すことがあるんだよ。

こいつがほんとに厄介なんだ。

しいて手がかりを言えば、受身の文なんだから、主語が受事主語だってことぐらいかな。

でも、それを言っちゃえば、どうやって受事主語って見分けるんだ！ってことになるよな…

でも、まったく手がかりが0というわけでもないんで、そいつにちょっと触れよう。

①官位の任免を表す動詞を用いる形

「任命する」という意味の動詞「任<sup>にん</sup>・擯<sup>はい</sup>・除<sup>じよ</sup>」、「土地や爵位を授ける」という意味の動詞「封<sup>ほう</sup>」とか、「罷免する」の意味の動詞「免<sup>めん</sup>」、「罪を責めて左遷する」の意の動詞「謫<sup>たく</sup>」なんかは、本来は普通に「誰かを任命する」とか、「誰かを罷免する」みたいに、後にその対象を目的語にとって用いられる動詞だよ。

ところが、主語が受事主語だと、それぞれ受身に転じて（＝受動態になって）、「任<sup>せら</sup>・擯<sup>せら</sup>・除<sup>せら</sup>」、「封<sup>せら</sup>」、「免<sup>せら</sup>」、「謫<sup>せら</sup>」のように読むことになるんだ。

これは主語と述語の関係からそうなるんだよ。

つまり、主語が受事主語だから受身で解釈するわけ。

たとえば、次の文なら受身じゃないよ。

成王封<sup>ス</sup>周公<sup>ヲ</sup>。 （成王が周公を封じる。＝土地を与えて諸侯とする。）

なぜかっていうと、土地を与えて諸侯にする立場にある成王が主語だからだよ。  
この場合は、「成王」は施事主語になる。

ところが、

周公封<sup>レル</sup>。 （周公が封ぜられる。＝土地を与えられ諸侯になる。）

これだと、土地を与えて諸侯にされる側が主語になるから、受身に解釈することになる。  
つまり「周公」は受事主語になる。

普通は次のように、後に「どこに」「とか」「何に」とかいう語句が伴うけどな。

周公封<sup>ル</sup>於<sup>ニ</sup>魯<sup>ニ</sup>。

▼周公魯<sup>ニ</sup>封<sup>ル</sup>ぜ<sup>ル</sup>び<sup>シ</sup>。

▽周公が魯に土地を与えられ（諸侯になつ）た。

ここで注意してほしいのは、「於魯」は前置詞句だけど、受動態になった述語「封<sup>レ</sup>」がどこに依拠するかという場所を明らかにしているのだから、受身の対象を表しているわけではないってこと。

つまりこの文は、文意から「周公」が受事主語だから、述語が受動態になるのであり、「於」前置詞句に

よって受身を表している形ではないんだよ。

## 吾昔謫<sup>ニ</sup>黄州<sup>ニ</sup>。

▼吾昔<sup>わんむせき</sup> 黄州<sup>くわんしゅう</sup>に謫<sup>たく</sup>せらる。

▽私は昔 黄州に左遷された。

これは前置詞句ではなく、場所目的語をとる例だ。

さて、この2つの例文の共通点がわかるかな？

え？ 後に場所を表す語が置かれる？

いやいや、さっきの例文「成王封<sup>ス</sup>周公<sup>ヲ</sup>」(成王が周公を封じる)だって、どこに封じるかを示せば、「成王封<sup>ス</sup>周公<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>魯<sup>ニ</sup>」(成王が周公を魯に封じる)となるわけで、場所を表す語の有無は決め手にはならないぜ。

官位の任免を表す動詞が受身の意味で用いられていると判断する決め手は、「目的語に人物を表す語をとっていない」ということだ。

だって、そうだろう？

たとえば、もし他動詞「封」が「周公」という目的語をとっていれば、当然「周公を封じる」という意味を表すことになる。

「食」が「桃」を目的語にとれば、誰がどう見たって「桃を食べる」という意味しか表し得ないのと同じだ。

逆に「封じる」という意味なら、後に「誰を」にあたる目的語がないと文が不安定になるよ。

だから、「目的語に人物を表す語をとっていないこと」は、**述語が受動態になっていると判断する重要な決め手になる**ってことなんだ。

## 軌思、天統中任<sup>ニ</sup>国子博士<sup>ニ</sup>。

▼軌思<sup>きし</sup>、天統中<sup>てんとうちゅう</sup> 国子博士<sup>こくしほくし</sup>に任<sup>にん</sup>ぜらる。

▽(劉) 軌思は、天統年間に国子博士に任命された。

この例も、「任命する」という意味の動詞「任」が「誰を」にあたる目的語をとっていないことから、受動態になっていることがわかる。

「国子博士」ってのは任命された役職だよ。

国立大学の教授みたいなもん。

受身かどうかを見極める決め手、わかったかい？

◎ポイント！…官位の任免を表す動詞「任・拜・除」(任命する)、「封」(土地を授ける・爵位を授ける)、「免」(罷免する)、「謫」(左遷する)などが、「誰を」にあたる目的語をとらない時、主語は受事主語で、動詞は受身の意味に転じる。

受事主語  
A 任<sup>せらる</sup>。

▼Aが任命される。

受事主語  
A 任<sup>せらる</sup>。官職名  
B。

▼AがB(官職名)に任命される。

受事主語  
A 封<sup>せらる</sup>。

▼Aが土地を与えられ(諸侯になる)。

受事主語  
A 封<sup>せらる</sup>。官職名  
B。

▼AがB(地名)に土地を与えられ(諸侯になる)。

・これらの動詞が「誰を」にあたる目的語をとる時は、普通に「任命する」などの意味を表し、受身の意味は表さない。

## ②その他の場合

前項、官位の任免を表す動詞のように、受け身に転じてる、すなわち受動態になっているのかもしれない！とわかる標識みたいなもんがあるといいんだが、それすらもない形かな、これは。

## 属公弒<sup>せらる</sup>

▼属公弒<sup>せらる</sup>はひびく。

▽厲公が殺された。

「弑<sup>し</sup>」は、臣下が主君を殺すという意味の動詞だよ。

この文、まさに主語が受事主語だから受身を表すとしか言いようがないんだが、それでもまったく手がかりがないわけじゃないんだぜ。

「弑<sup>ス</sup>」は「誰を」という目的語をとる他動詞じゃないか。

もし誰かを「殺す」という意味で用いられているなら、目的語が置かれるのが普通だろ？

それが置かれてないってことは…というふうに考えてほしいんだな。

それが漢文を読み解くセンスってやつだよ。

それに、「弑<sup>ス</sup>」って、下剋上で殺すって意味だぜ。

厲公は立場上トップ、誰かに殺されはしても、自分が下剋上で誰かを殺すなんてあり得ないだろ？

じゃあ、「弑<sup>ス</sup>」じゃなくって「殺<sup>ス</sup>」ならどうだろ？

下に目的語を置いて、たとえば「厲公殺太郎」の語順なら、百人の中国人が百人とも「厲公が太郎を殺す」って理解する。

でも、「厲公殺」だったら、なんか変って思うんじゃないかな。

「殺<sup>ス</sup>」は他動詞なんだから、普通は目的語をとるもんだよ。

具体的な「誰か」を示さないまでも、たとえば「厲公殺<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>」って表現したいところだよ。

それがそうならない、怪しいよね、やっぱり。

もちろん必ず受身だと言いつけることはできないけど、ひよっとして「厲公」は受事主語で、「厲公が殺される」って意味じゃないか？って疑うことはできるよね。

あとは文脈からの検証だよ。

手がかりの少ない「主語が受事主語であるため受身になる形」って、ほんと難しいよ。

訓読してあれば何の問題もないけど、白文の場合はほんと難しい。

でも、決して「文脈から判断して受身で読む」というあいまいなものではないんだよ。

◎ポイント…主語が受事主語であるため受身を表す形も、述語動詞がどんな目的語をとっているか、あるいはとっていないかで、ある程度受身かどうかを判断することができる。

さて、受身の形はこれで終了。次は否定だよ。がんばろう！